研究経過報告書

2026 年 9 月 14 日

研　究　員 （留学者）	政経学部　准教授　　板山真弓
派 遣 期 間	2025　年　9　月　1　日　～　　2026　年　8　月　31　日
研究主題等	日米同盟における社会化の進展―冷戦初期の共同訓練に注目して
報 告 事 項	1．研究目的 本研究の目的は、「日米防衛協力のための指針」（1978年）策定以前の日米防衛協力、特に、共同実動訓練の実態を明らかにすることである。従来、当該時期に実施された日米による実動訓練は、自衛隊の戦技向上のためだとされてきた。この点に異議を唱え、有事への共同対処を前提とした共同実動訓練として捉えるべく実証を行うこととする。本研究が達成されれば、日米防衛協力の実態解明に向けて大きく前進することが期待されるのみならず、当該時期の日米同盟に共同防衛の側面が存在したことに関する実証をより強固なものにすることが可能となる。これは、日米同盟を対称＝非対称ハイブリッド型同盟と捉える独自の議論を、さらに確実なものにすることにつながる。また、日米同盟を「社会化」概念を用いて分析する点も、本研究の独自性として挙げられよう。「社会化」とは、元々社会学で提唱された概念であり、人間が、教育や訓練を通じて社会で容認される規範や行動様式を受け入れることにより、その社会に適応することを学ぶ過程のことを指す。本研究では、当該概念を用いた上で、日米共同訓練を、様々な側面（軍事、政治、経済、文化等）における社会化の過程として描き出すこととする。 2．研究活動 派遣先は、ハーバード大学ウェザーヘッド国際問題研究所に設置されている日米関係プログラムであった。派遣前の時期に、トランプ政権とハーバード大学との対立が激化し、一時はビザが発給されないことになるのではないかとの不安が生まれる状況になった。しかし、有難いことに、日米関係プログラムやハーバード大学インターナショナルオフィスから、きめ細やかなサポートを頂くことができ、無事にビザを発給して頂けることになった。

	日米関係プログラム及びウェザーヘッド国際問題研究所は、極めて多様性に富んだ環境であった。日米関係プログラムの参加者は、私のようなサバティカル期間中の研究者のみならず、米国の大学で博士号を取ったばかりのポスドク研究員、政府機関や民間企業からの派遣者など多岐にわたり、年代も20代から60代まで幅広く在籍していた。また、日米関係プログラムが存在するウェザーヘッド国際問題研究所は、約130名の研究者及び実務家が世界中から集まり構成されていた。プログラムや研究所内外の人々との交流を促すイベントも多く、背景や世代の異なる研究者・実務家との交流は、自身の専門領域を越えた多角的な視点を得る貴重な機会となった。また、在外研究期間を通じて、学術的な側面にとどまらず、各種レセプションや在ボストン日本総領事館関連のイベントなど、多様な催しに臨席する機会に恵まれた。これらの場を通じて、様々な方々とのネットワークを構築することができた。 日米関係プログラムでは、学期中にセミナーが実施され、参加は必須であった。いくつかのセミナーでは、終了後の講師を囲んでのランチに招待して頂き、より深い議論を行う機会を頂くこともできた。また、それに加えて、ハーバード大学内外で催されたセミナー及び学会・研究会にも精力的に参加した。ハーバード大学では、学期中は毎日、多くの部局でセミナーやシンポジウムが開催されており、また、近隣にはマサチューセッツ工科大学（MIT）やボストン大学等、多くの大学が存在し、そちらでもセミナー等が頻繁に開催されていたため、参加するセミナーには事欠かない状況であった。さらにはハーバード大学の授業に参加させて頂く機会もあり、教育の面でも学ぶことができた。 また、日米関係プログラムのエグゼクティブディレクターであるShinju Fujihira博士との月に一度の面談を通じて、研究進捗の確認と指導を受けた。その他、ハーバード大学内外の先生方や大学院生の方々と個別にお会いし、研究課題に関する議論を行うことができたことも、研究の進捗を大いに促した。その結果、プログラムの義務であったシンポジウムでの研究報告及び論文の提出については、無事に全てを完了させることができた。シンポジウム等での議論を反映させることで、当初の想定以上に質の高い成果をまとめることができたことは、大変有難いことであった。 このように、学期中はプログラムの活動を中心に据える一方、休暇期間を最大限に活用して精力的に調査を行った。具体的な調査先は、以下の通りである。

	・冬休み（12月中旬～1月下旬）：米国国立公文書館、議会図書館、陸軍戦史センター、ジョージア大学図書館、コロンバス州立大学図書館等 ・夏休み（6月～8月）：米国国立公文書館、議会図書館、カーター大統領図書館、各地域の国立公文書館（ボストン、フィラデルフィア、サンフランシスコ、リバーサイド）等 　また、学期中には、ハーバード大学図書館、MIT図書館、プリンストン大学図書館、コロンビア大学図書館、ケネディ大統領図書館等にて調査を実施した。ハーバード大学には約70の図書館及び図書室が存在し、全米有数の蔵書数を誇る大変充実した研究環境であった。そちらにおいて、日々、研究を進めることができたことは大変有難いことだった。さらには、デジタルアーカイブやデータベースを活用した調査も、オンライン上で継続的に実施した。調査に加えて、多様な研究コミュニティにおいて成果報告を行い、貴重なフィードバックや新たな展開を得ることができた。具体的には、上記のハーバード大学日米関係プログラムにおけるシンポジウムへの登壇の他、Association for Asian Studies及びEuropean Association for Japanese Studiesの研究大会（後者はオンライン）にて発表を行った。また、日本国内の2つの研究会にもオンラインにて参加し、研究成果についての報告を行った。 ３．成果及び今後の展望 　在外研究期間における研究活動を通じて、以下の点において有意義な成果を得ることができた。 　第一に、国際的な研究展開における重要な基盤の構築である。所属先のハーバード大学を中心とする米国の研究者とのつながりができたことに加えて、Association for Asian Studies の研究大会への参加を契機としてアジア地域の研究者、そしてEuropean Association for Japanese Studies の研究大会への参加を通じて欧州地域の研究者ともつながることができた。その中では、論文執筆の依頼を頂いたり、研究上の重要な助言及び史料等の提供を頂くこともあり、今後の研究発展に繋がる重要な礎を築くことができた。 　第二に、「2 冊目の単著出版」という明確かつ具体的な研究目標に基づく研究の遂行である。ウェザーヘッド国際問題研究所のオリエンテーション初日より、多くの研究者から次回作（2 冊目の著作）の構想について問われた。博士論文を基礎とした 1 冊目の著作の出版以降、個別論文の執筆及び出版は継続してきたものの、自らの研究を 2 冊目の著作としてまとめる意識は十分に高まってはいなかった。現地研究者からの強い関心と問いかけ

	は、自身の研究を中長期的な構想の中で捉え直す大きな刺激となり、その構想の下、研究を進めることができた。 　第三に、研究成果の国際発信（拙著の翻訳）である。既存の日本語著作について、従来より国内の研究者から翻訳を勧められ着手していたが、今回の渡米中にも複数の研究者から同様の推奨を受けた。本研究内容が欧米圏の学術界において一石を投じる可能性があると感じたため、現在、英語版の完成に向けて翻訳・校閲作業を鋭意進めている。 　上記成果を踏まえ、今後は以下の３点を中心に、研究を精力的に推進する所存である。第一に、2 冊目の単著執筆・出版に向けた作業の本格化である。米国滞在中に、2 冊目の著作について構想を練り上げ、基本計画及び章立ての立案及び史料収集を実施した。今後は更なる史料収集や分析、執筆等の実施を行い、最終的な出版を目指して取り組むこととする。 　第二に、科学研究費助成事業に基づく研究の完遂である。今年、採択された科研費課題について、在外研究期間中に得た知見や国際的ネットワークを反映させながら、計画に沿って研究を着実に推進することとする。これは、2 冊目の単著の一部となる予定である。 　第三に、拙著の翻訳を進め、出版を実現させることである。そこでは、単に言語を置き換えるのではなく、国際的な学術コミュニティにおける研究の中に自らの論旨を位置づけ、必要に応じて追加の背景情報を提供する等の作業を実施することとする。 謝辞 　この度は、貴重な在外研究の機会を提供して下さいました学内関係者の皆様、並びに渡航前から滞在中まで細やかなサポートで支えて下さいました関係部署の皆様に、心より御礼申し上げます。また、不在期間中の講義や各種学内業務についてご支援下さり、温かく送り出して頂きました同僚の先生方にも深く感謝致します。多くの方々からのご理解とご協力を頂いたことにより、今回の在外研究を遂行することが可能になりました。在外研究で培った知見やネットワークを、今後の教育・研究活動および大学への還元という形で活かして参ります。本当にありがとうございました。